

現代日本の反レイシズム運動に関する実証研究 (2)

——社会運動のマルチ・イシュー化と社会運動論

日本学術振興会 (PD, 上智大学) 富永京子

1. 目的

現代日本における反レイシズム運動は、大きく分類して二点の特質をもつ。第一に、「レイシズム団体」という明確な敵を持つ点、また運動の中で「反レイシズム」という問題だけを扱うのではなく、より大きな「反差別 (性別による差別、学歴差別など)」に対する問題意識を包括する点である。本稿では、とくに現代における他の運動にも顕著に見られる要素として、第二に挙げた「運動のマルチ・イシュー化」と、運動の持続・発展について検討してみたい。反レイシズム運動が「差別」にまつわる複数のイシューを含むことによって、社会運動のプロセスはいかに変化するのだろうか。

2. 分析視角と方法

運動従事者に対するインタビューデータの分析を行う。多くの論者達が、社会運動組織のマネジメントや運動のオーガナイズを通じて、活動家たちが自らの政治的理念を反映することを明らかにしてきた (Haug 2013 など)。本研究もまた、運動組織のオーガナイズ・意志決定・レパトリー選択・スローガンの形成といった、社会運動の言わば「マネジメント」とでも言うべき部分に注目したい。

3. 結果・結論

データ分析の結果、活動参加者たちは運動のスローガン、レパトリーのあり方、警察への対応、メンバーシップのあり方などをめぐって激しく対立することになる。こうした背景として、運動の過程すべてを「社会運動」として見なし行動する人々と、あくまで社会運動を目的に対する手段として捉える人々の間において、社会運動に対する捉え方の違いがあるためだと考えられる。

前者のような考え方を持つ人々は、多様な学歴・階層、世代・運動経験、性別や民族を内包する運動の中でその差異を乗り越え共在しようとする。それに対し、後者のような考え方を持つ人々は資源を動員して運動を成立させようとする。両者の担い手たちが互いに作用しあう点で、現代の反レイシズム運動は「経験運動」(McDonald 2002) としての側面と「資源動員論」(McCarthy and Zald 1977=1989) としての側面が複雑に混じりあって存在するとも考えられる。こうした実態は、2011年の東日本大震災以降の反原発運動や反グローバリズム運動においても顕著に見られ、時として運動従事者同士の対立となってしまふ。この対立をいかに調停するか考える上でも、両議論の接合を図る必要があるだろう。

参考文献

- Haug, Christoph, 2013, Organizing Spaces: Meeting Arenas as a Social Movement Infrastructure between Organization, Network and Institution, *Organizational Studies* 34(5): 705-732.
- McCarthy, John and Zald, Mayor, 1977, "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory" in *American Journal of Sociology* (82): 1212-1241.
- McDonald, Kevin, 2002, "From Solidarity to Fluidarity: Social Movements beyond 'Collective Identity': the Case of Globalization Conflicts", *Social Movement Studies* 1(2): 109-128.